

研究分野のキーワード：教育社会心理学，教育機能，教師のリーダーシップ，学級集団

研究紹介

おそらく、多くの高校生のみなさんは、日々学校や家庭で何らかの教育を受けていることと思います。学校あるいは学級集団で起きるさまざまな教育問題を、学校組織・学級集団、あるいは学級集団内の人間関係にみられる心理から説明するのが教育社会心理学です。

そもそも、教育とは何でしょうか。教育が子どもにもたらす影響や機能（働き）から考えると、教育は、一つには、子どもたちに新たな知識や技術あるいは問題解決力を身につけさせて、現状よりも能力を向上させる働きがあります。もう一つは、子ども個人の考えや価値観、現状の能力を尊重して、子どもに寄り添って子どもを肯定する働きがあります。この二つの教育の働きが効果的に発揮されることを目的とした場所が、学校あるいは学級集団であるといえます。

ただし、やっかいなことに、教育の働きを二つとも学校のなかで教師が発揮するのは難しいといわれています。子ども個人の考えや現状の能力を尊重して授業を進めると、教師としては学んでほしいけれども子どもにとって難しい学習内容を、教師は教えるにくくなります。逆に、難しい学習内容ばかり教師が教えていくと、子どもは「先生は私に合わせてくれない」と感じて、授業や勉強から気持ちが離れていってしまいます。教育の二つの働きは、相反する関係にあるといえます。

では、学校は、どうすれば相反する教育の二つの働きをともに効果的に実行できるようになるのか、それはなぜかについて、教育の担い手である教師のリーダーシップから検討しています。教師が具体的にどのような声かけをしてリーダーシップを取ると、子どもの能力が伸びると同時に子ども個人をも尊重できるのか。この問題について、小学校の授業観察をしたり、教師にインタビューをしたり、あるいは子どもたちにアンケートをとったりしてデータを集めて分析しています。これらのデータから、意外かもしれませんが、教師の声かけや態度として、教師が子どもの様子や学修レベルをよく理解したうえで、教師が細かな指示や説明をせず子どもを課題に向けて突き放す、いわば「あたたかい突き放し」が子どもにとって効果的であることが見えてきました。一見すると教師は何も教えないので「教育的」ではないように見える突き放す態度がむしろ子どもの教育を促す、このような、少々へそが曲がった仮説をたてて、では、なぜ「あたたかい突き放し」が子どもにとって効果的かについて、子どもと教師の関係、子ども同士の関係にみられる心理から日々研究しています。

また、これまでに研究して見えてきたことをもとにして、学級経営や子どもとのコミュニケーションの取り方に苦慮されている先生をアシストする、学級コンサルテーションという取り組みもおこなっています。